

利用者が事業者育てて

理想の一時預かりを考える④

生まれつき、少しずつ体の筋力が衰縮していく筋気なので、身の回りのことはほとんどできません。それでも多くの人に支えられ、生きてきました。「恩返しに社会の役に立ちたい」と幼少の時、障害者の白痴にヘルパーなどを派遣する会社を設立しました。

高校3年の時に母親が亡くなった後は、私の介護が大変なため、きょうだいの関係がぎくしゃくしたつらい経験もあります。介護者の負担軽減につながる短期入所のあり方を常に考え続けてきました。

養子(重いの障害児ケア)が必要な在宅の障害児ケア(ケア)が必要な在宅の障害児



溝口 伸之さん(40)

みぞぐち・のぶゆき 1973年生まれ、福岡市博多区在住。障害者の訪問介護や移動支援などを行う居宅介護会社「きらきら」(同市)社長。市障がい者生活支援事業所連絡会事務局長なども務める。

・者を短期入所として預かる病院不足が課題となっていて、ヘルパーなどにも認められるが、私は、食事や排せつなど基本的な介護サービスしか行っていない「福祉型」の障害者施設だが、もっとケアに対応していけば良いのではないかと思っています。

改正で、一定の研修を受けたヘルパーなどにも認められるようになりました。訪問介護のヘルパーによるケアも徐々に広がっています。重い障害児・者は体調が変化しやすいため、土日や夏休みなどに重なる生面、平日は少ないことも原因です。

ただ、福岡市内で、短期入所施設(約40カ所)の稼働率は約4割にとどまっているそうです。ケアに対応できる病院でも、リスタを懸念して預かりを拒むケースもあると聞きますが、利用者のニーズが、土日や夏休みなどに重なる生面、平日は少ないことも原因です。

私は、短期入所サービスを広げるには各事業者が「質」を高める努力はもちろんですが、利用者側も意識を変えていく必要があるのではないかと考えます。「慣れている所には預けたくない」では、現状ではいつまでも預かり先は見つかりません。

障害者のケアに慣れていない施設にとっては、初めて預かるリスクが心配でしょうが、例えば、日ごろから訪問介護で親も子も顔なじみの介護職員が、施設に回帰か足を運んで、その子特有のケアの方法を引き継ぐことができるとすれば、知らない施設に預ける親の不安も解消できます。

複数の施設を積極的に利用すれば、結果的に自分の支援者が増え、ケアに対応できる人材を広く育成することにもつながります。利用者が常時いれば、施設側も安定した収入につながり、事業として成り立っていく。もともと医療型に比べて報酬が低い福祉型の参入を進める上でも、効果があると想います。事業者を育てていくのは結局、利用者ではないでしょうか。

短期入所 重い障害児・者を病院などで一時的に預かる福祉サービス。自宅介護する親たちの負担軽減策の一つ。療の吸引など、医療的ケアに対応する施設は「医療型」と呼ばれる。